
ドジで不幸な私はボロボロです...

夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドジで不幸な私はボロボロです…

【Nコード】

N4759S

【作者名】

夢幻

【あらすじ】

ドジで不幸な主人公が友達と一緒に1日1日を過ごしていくお話です。

1日目（前書き）

初心者がかいた、無茶苦茶なお話です。その部分は、気にせず読んでいってください。
お願いします。

『欧米列強は、資源や市場などを求めて、アジアやアフリカの地域を軍事力によって植民地にこのような動きを（　　）（主義といった。』帝国主義つと。』

ピンポン

「はい。今行きまーす。」
ぐきつ

「痛あああああ！足、つつたあああ」

5分後

「やっと足から痛いのがなくなったあ。やばっ、はやくでないとう。」

「はい。どちら様ですか？」

「おーすっ！」

「待て待て！帰ろうとすんな！」

こいつは、宮田^{みやた} 双馬^{そつま}と言い、いろんな人からソーマと呼ばれている。

よくしゃべるので、友達が多いが、とてもウザがられることが多い奴だ。

「俺がなにしに來たと思っただ！」

「どうせ『遊ぼうぜ』みたいなこと言いに来たんだろ。」

「ぐっ、まっ、まあそのとうりだが、今回は、一緒に宿題やるうともおもっただよ。」

「……………はあ？」

おまえそんなこと言っやつじゃねーだろ。

おまえは、『永遠に、遊んでやるぜえー！』ってやつだろっが。

「いや。だから、勉強するぞって言ってるんだよ。」

「分かったから黙れ！俺の部屋に來い。」

「よし。わかった。」

だるい。めんどくさいやつが、増えた。はあ。

「で、さっきまでなにやってたの?」

「宿題。」

「教科は何?」

「社会。」

「他は、何やってたの?」

「そろそろ黙れ。追い出すぞ。」

「ごめーん。」

ああああもうはんぱなくうぜえええ!

何こいつ。邪魔しに来たの!もう、早く終わらせて帰れえええ!

「なあ、これどう解けばいいの?」

「移行使って計算しろ。そして、もうしゃべるな。」

2時間後

「大体終わったから帰るわ。」

「おう。早く帰れ。」

二度と来るなっ!

「やっと、まともに見える。あいつが、なんでもかんでも聞きやがって。」

ぐぎゅるううううううううう

「はらへった。なんか食べよ。」

「冷蔵庫の中、なんもねえ!」

むちゃくちゃ腹減ったのに、どーしょ。

「……何か買いにいっ。」

まさかまたあのコンビニいくとは、大体信号で止まるのに。

げっ、さっきのトラックのせいで、道が、通行止めになってる。回り道して、コンビニに行く」。

「何、買おうかな。ポテトチップスにするか、それとも、弁当にするか。」

ガサッ

あ、ポテチとられた！

「仕方ない、弁当買って帰る。」

うわっ、けっこうレジ混んでる。並ばないといけないのか。はあ。

15分後

「やっと、買える。」

「499円になりまーす。」

「そろそろ今月の小遣いがなくなる……。あと2週間もあるのに、残金301円か。」

俺。今月何買ったっけ、……。そーいや漫画買ったな。はあ、買うんじゃなかった。あっ！宿題！」

やばい、宿題のこと、思いっきり忘れてた。早く帰らねーと。

「えっと、何が終わってなかったっけ。数学と国語か。」

あっ、国語は、漢字書くだけだ。とつととやっておわらせよ。

「えーと、（ ）の文字を漢字にきなさい。『1番 パソコンの修理を（ ）（ ）する。』」

45分後

「国語終わったあー！」

もう夜の8時だよ。じかんかけすぎた。

グラグラグラグラグラグラグラ

「えっ、地震？　ぎゃあああああ！！本棚倒れて宿題つぶれたあああ！！」

1時間後

「片づけ、終わったあ。」

早く、数学やらねーと、やばい。寝る時間が無くなる。

2時間後

「終わったあああああああ！！」

やっと、終わった、もう11時じゃん。そろそろ寝よ。

次の日

「宿題、1教科だけ、忘れたああああ！！」

もうだるい、学校に来るとき2回も車に轢かれそうになるし、転んで怪我するし、

ほんとーに、だりiiiiiiiiiiii！！

1日目（後書き）

初心者ですので、アドバイスおねがいします。

2日目(前書き)

優也の学校での話の続きと、家での話です。
とりあえず、読んでみてください。

ちまった、今飯買ったばっかだけど、同じコンビニで、なんか買って食べよ。

「げっ、あいつに金貸したせいで、27円足んねえ。どうしたのか……………」

「お客様、お客様こちらのレジをお使いください。」

「すみません、また後で行きますんで。」

アイツ、本当にむかつくうううううう！明日思い切り文句を言つてやる。

「よし、一回帰ろう！」

20分後

「ただいまー。」

「おかえりー、優也」

今のは、俺の母親で、舞華と言う、年齢はまだ教えてもらってないが、たぶん37歳だと思う。

「ちよつと、帰ってくるの遅くないか。」

「仕方ねーだろ、あまりにも腹減ってたから、そのコンビニで、少しか飯買って、食いながら帰ってきたんだから。」

「で、どれだけ使った？」

「138円使って、おにぎり買ったけど。」

「そうか、じゃあ、お前の昼飯抜きな。」

ええええええええええ！ちよつ、何でだよ！俺なんか悪いことしたか！

「なんでだよ、母さん！」

「早く、帰ってこいって、昨日言っただろが。ちゃんと言ったぞ、忘れたら、明日昼飯抜きって言ったぞ。」

……………どうしよう、原因言われても、まったく思い出せん。

「……………ごめん、お願いだから飯、食わして。」

「駄目だ、約束を守らんかったお前が、悪い。」
「やっちまった、何でそういう事忘れたんだろっ、……………あつ、
彼奴のせいだ、あの桐覇って奴のせいだ。明日、あいつに文句言っ
てやる。そして、思いっきり蹴ってやる。」

3時間後

ぐぎゆるううううう

「うわっ、すごいでかい音で、腹がなってやがる。コンビニ行って
なんか買いに行きたいけど、あいつに金貸したせいで何も買えない
し、あーもうあいつをぶん殴りてー！」

「はあ、母さんに頼んでなんか作ってもらおう、作ってくれるか、
わかんねーけど。」

「母さん、なんか作ってくれー。頼む！」

「うるさい、自分の部屋に戻っけ。」

「それって、自分がテレビ見てるからだよなあ、めんどくさいから
だよなあ、はあ自分の部屋に戻る。」

ぐぎゆるううううう

「腹減ったあああああ！けほっけほっ叫んだせいでのど痛い。」

「うるさい！優也！そんなんだから、体即壊すんだよ！」

「そんなこと言われても困るんだけど！物壊したら思いっきり怒ら
れる事わかってるから、叫んでんだけど、それで、怒られるなら俺
は、何をしたらいいんだよ。」

「もう無理限界、俺寝る。」

3時間後

「ふあああああああ、今何時だ？げっ、もう8時じゃん。」

早く戻らねーと、飯抜かれる。

「優也、お前おりてくんの遅すぎ、飯抜きな。」

「ちよっ、俺また飯抜きかよ。さすがに、昼飯と晩飯抜かれたら、明日もたねーぞおおおお！」

「だから、降りてくんののが、遅いから悪いんだよ。」

「ああああああ！もう本当に嫌だああああああ！」

2日目（後書き）

ここまで、読んでいただきありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。感想をお願いします。

3 目 目 前半編（前書き）

やばい、駄文でぐだぐだになっちゃった。
そんなことは、気にせず読んでってください。

「何が、分かってないんだ？」

「はあ、もういい何も聞くな。で、なんの用だ。」

「いや、うるさいからさ、何かあったのかなーって思っただけ。」

「そんなどうでもいいことで、話かけてくんよ、一回そこでもくたばつとけや、本当にウザいんだだけ。」

「なんでもないから、早くあつち行け。」

「なんで、こいつはこんなにも、うつとうしいの？誰か教えてくね？」

「おーい、その……えーと、誰だっけ？」

「じゃあ、話しかけんなよ、誰だか知らねーけど。」

「おーい、聞こえてるのか、そのロン毛男子。」

「それって、俺も当てはまるけど俺のことなのか？」

「だから、聞こえてんのかー、それとも無視してんのか。」

「いや、名前言わなかったら、誰かわかんねーだろ。」

「思い出した！佐藤だっけ、金返しに来たぞー。」

「あいつかああああああ！えーと天河 桐霸だっけ、そういえば、あいつが廊下で倒れてるから、俺が飯を食えなかったんだよな。よしっ、飛び蹴りするっていたんだから、やってこよ。」

「おーきたきた、昨日はすまん。」

ドカッ

「痛っ、ちよっとお前金返さなかったらするって言っただけだろーが！」

「そうだったけ？まあいいか。もう一回やるから、そこに立つとけよ。」

「いやいやいやいや、待てや、お前！突然なんなんだ！」

「いや、お前のせいで昨日昼飯と晩飯食い損ねたんだよ！」

「知るか、そんなこと。俺そんなことで飛び蹴りくらったのか！」

「そうだけど、何か？」

「だから、蹴るなって言っただけのわかる？本当にもうやめてくれねーか！」

「嫌だし、お前のせいでこうなったんだから、やってもいいじゃん。」

「やめろ、駄目だって言ってるんだろが、馬鹿かお前は。」

「誰が馬鹿だ、馬鹿はお前だろーが。」

「馬鹿って言うな！とりあえず、はい、昨日借りた200円。」

「やっと帰ってきた、なんであいつ金忘れたんだ？聞いてみよ。」

「そついや、なんで昨日お前金忘れたの？」

「えーと……誰かに金借りるって言って話相手ができるかなーって思っつて、友達いなかったから。」

「俺そんなことに巻き込まれたのか！適当に話しかけたらよかったじゃん！もう嫌、こいつとかかわりたくない。」

「とりあえず、友達に、なっつてくんね？」

「うん、絶対に嫌！」

「そんなはつきり言わなくても……。」

「だって、俺お前のことが嫌いだもん、かわりたくもないし。ってかなんで俺なんだ？他の人に頼めや。わざわざ金借りてまですることじゃねーだろ、それ。」

「友達になりやいいんだろ。でも、それは、なっつてくれって言つものか？」

「普通は、気が付きやなっつてる者だろ。」

「まあ、いいじゃん。よかつたー、これでやっつと友達が出来たー、八人目だよ、もう！」

「それって本当に言ってる？」

「八人以上も『友達になっつてくれ』って言ってるの？」

「俺ってあまり嘘つかねーぞ。嘘つく意味ねーし。」

「時には、嘘は必要だろ。」

「はあ、んじゃ、また後で。」

「じゃーねー。」

「やっつと、ウザいやつと離れられた。やっつぱり、俺って不幸なのかな？周りに集まるやつは、全部ウザいやつばっかだし、めんどくさ

いことに巻き込まれるし、おかげで、いつも疲れる。
キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン
「げ、授業始まったし、だるい、減点だあああああ！」

「おいっ！佐藤！お前今まで何してた！」

「えーと……友達と話してました……」

「お前そこで立ってる。授業再開するぞー。」

またあいつのせいでだるいことになった……… あいつ絶対に
いろんな人に迷惑かけてるだろ、例えば、家族とかに、たぶんそう
だろうな。

「いつまで、そこにいるつもりだ、早く席に座れ。」

お前さっきそこに立ってる！って言うてたろーが！ふざけんなよ
！でも、また言われるのめんどくさいし早く座ろう。

「あつ忘れてたわ、お前にそこに立ってるって言ったの忘れてたわ、
まあいいか。とりあえず座れ。」

今それ思い出すかあああああああ！ふざけんなあああ！
いい加減にしるよ、こん畜生があああああああ！

「はあ、だるい。」

「何がだるいの？優也？」

「へ？なんか言ったか。」

つて、ええええええええええ！お前同じクラスだったのかああ
あああああ！天河だったけ？

こんなにウザい奴と同じクラスでしかも席は隣かよおおおおお
おお！

1時間後

「授業も終わったし、もう一回聞けど何がだるいの？」

「教えてやるう、お前と同じクラスで席が隣だからだ（笑）」

「お前ってひどいこと言うよな、傷つけられるこっちの身にもなっ

てみる。」

こっちの身にもなってみろだと、ふざけんな、こっちは精神面と肉体面でもうボロボロなんだぞ、変わりたいなら頼むから変わってくれや、変わるものならな。

「大丈夫だ、気にするな、俺は問題無いから。」

「お前に問題が無くてもこっちには問題があるんだよ！」

「だから、何なんだ？」

「もういい、この話は終わりにしようか。でもうすぐチャイム鳴るけどどうする？次確か移動教室だけだ。」

「あつ、忘れてたああああああああああああああ！」

あと一分でチャイム鳴るじゃん！次は確か理科だったよな……

……理科室まで行くのに走ってももう絶対に間に合わねえし
いいいいいい！ああ、アイツのせいでまた減点だあああああああああああ
あああ！

「おい、優也ー行かないのかー。」

「うるさい、そんなこと言っている暇があるなら早く行った方がいいだろ。」

「あーそうだな、でもお前待ってるから早くしてくれ。」

はあ、おまえ何言ってるんだ、勝手に行ったらいいだろが馬鹿が。

「いいから先に行け！」

「っ！分かった、んじゃ先に行ってるぞー。」

キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン

「授業始めるぞ、全員席につけ。」
ガラッ

「遅れてすみません、すぐに席に座ります。」

「座らなくていい、そこに立つとけ。」

ああああああああああああああああああ！またこいつのせいで立たされたああああああああああ！腹立つわああああああああああああああ！今日、何回目だよ、二回目か。

「ドンマイっ、優也。」

こいつ、誰のせいでこうなったのかわかっているのか？わかってなかったらこいつ相当馬鹿だぞ。

「どうする優也、謝っとくか？それとも、このまま立っておくか？」

「ふざけんな、誰がこのまま立っておくって言った？謝って座るに決まってるだろ。」

「おい、お前ら立たされているのわかってんのか、なあ。」

「すみません、先生。」

はあ、またこいつのせいでめんどくさいことになった、これで謝ってもほとんど無駄になったぞ、さて、どうするか……………

「先生、すみません。席に座らせてください。」

あっ、こいつ先に謝りやがった、俺が立っている理由こいつなのに、本気でふざけてんのかこいつ。

「先生すみません。」

「二人とも早く席につけ、授業再開するぞ、んじゃあこの問題解いてみる、この部屋にいなかったわけじゃないから答えられるよな、

佐藤。」

「うう、分かりません……………」

わかるかああああああああ！俺さっきまで天河と話してたよね！授業聞いてなかったよ、俺！ってよく考えると俺が悪いんだよな、はあ。

「じゃあ、天河答えられるか。」

「細胞分裂です。」

……………あいつってあんなに頭よかったのか、なんか複雑な気持ちだ。

キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン

やっと授業終わった、もう帰りたい、でもまだ4時間あるんだよな、はあ。

「もう嫌だああああああああああああああああ！」

3 目 目 前 半 編 (後 書 き)

こゝまで読んでいただきありがとうございます

3 日目 中盤編(前書き)

駄文のできあがり!!

3 日目 中盤編

「あゝ一日ってこんなに長かったけ？」

「知るかそんなこと、寝てたら気が付けば終わるって。」

「ソーマ、俺等は今受験生だぞ、そんなことしてたら内申点下がるだろ。」

「気にするなっ！……！」

「気にするわっ！……！馬鹿がお前はっ！……！」

「馬鹿ですけど、何か？」

「………やっぱりお前といると疲れるわ。という訳で俺は寝る……！」

「言ってることが、意味不明なんだよ！起きろ！」

「………こいつうるさい、なんかすごい殴りたい、今殴ってもいいかな？まあ、殴るのは一応やめておこう。」

「うるさい、寝させる。」

「いいから起きろ！もうチャイム鳴るぞ！」

「まだ鳴ってないだろ！いい加減黙れ！こっちはあんまり寝てないんだよ！」

「そんなこと言っただって時間は止まらないんだよ！」

「そんな事は、分かってるって！」

「じゃあ寝させてくれ、ほとんど寝てないんだ。」

「だーかーらーもうチャイム鳴るっつてんだろっがああああああ！……！」

「だーかーらー寝させろっつて行ってんだろっがああああああ！……！」

「キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン」

「ほらお前のせいで一睡もできなかったじゃねえか！……！」

「昨日から寝てないお前が悪いんだろっがああああああ！……！」

「勉強してたんだよ！文句でもあっか！」

「そんな時間から勉強すんなっ！帰ってからやれや！」

「めんどくさいから遊んでるんだよ！」

「めんどくさがるなっ！ちゃんと勉強しろ！」

「嫌だ！」

「みんなちゃんと席に着け！」

うぎやああああああああ！先生来たああああ！！ま
ったく寝れなかったあああああ！！あいつ後で思いつきぶん
殴ってやる、絶対に殴る、殴ってやるんだあああああ！！！

50分後

「や、やっと授業終わった……………、くそ眠いのに起きてるの
しんどかった……………。もう動く元気も無い……………、今すぐ帰
りたい。」

「優也、授業中白目むいてたぞ、大丈夫か？」

「……………、ごめん、なんか言ったか??」

「お前本当に大丈夫か！」

「……………ごめん、本当に何も聞こえない、なんて言ったん
だ？紙に書いてくれ、頼む。」

「こいつ眠すぎて体の機能が停止してやがる、紙に書いたらいいん
だな、えーと、本当に大丈夫か？つとよし、これでいいな。」

「……………何も見えん。」

「こいつ目が悪いの忘れてた！こいつの眼鏡は……………あつ、あ
つたあつた、これかけてから読んでみる。」

「zzz」

「……………こいつ寝てやがる。今までなら思い
つきり蹴って起こすけど今日はいつか。優也ー死ぬなよー（笑）」

キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン

「あつ、チャイム鳴った、優也ー先生に見つかるなよ。」

「わかった、先生来たら教える。」

「っ！お前いつから起きてた？」
「チャイムで起きた。」
「んじゃ、起きとけよー。」
「嫌。」
「起きとけよ。」
「嫌。」
「じゃあ先生来ても起こさないからな。」
「もうそれでいいや。」
「全員座れー、授業始めるぞ。」

1時間後

「よかったな、見つからなくて。」
「ああ、まったくその通りだ、危なかったあ、俺の前の席まで来
んだよ、見つかると思った。」
「起きてたのか、優也？」
「お前が起こしたんだろ、起きてたのかって聞くな。」
「あつ、そっか、忘れてた。」
「次こそは、寝させるよ、絶対に。」
「寝させてたまるか（笑）」
「……………ぶん殴る。」
「……………え？」
「ちよつと、そこに立ってる。」
「ちよ、待て、やめろ、来るな。落ち着け、優也、怒ること無いだ
ろな、来るなよ。」
「逃げるな、待てや、こらあああああああ！……………！」
「来るなあああああああああ！……………！」
「逃げるなあああああああ！……………！」
俺、次の時間死ぬな。生きてたら、奇跡だわ。」

3 目 中盤編（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

3 日目 後半編（前書き）

三日目第3部完成！

3日目 後半編

「動きすぎた……………もうだめ死ぬ、動きたくない。」

「ははははははは、さっきはすまん。悪気しかなかったが許してくれないか！」

「ふざけてんじゃねえよ。一回死ぬか？」

「……………そんなに怒ってる？」

あたりまえだ！俺がどんな思いをして追いかけてたと思ったんだ！腹減って動きたくないのにいろいろやってきやがって殺す気か！ふざけんじゃねえ！

「お、おい、優也、だいじょうぶか？なんかブツブツ言ってるけど？」

「え？何？死にたいの？俺はお前を思い切り殴りたいんだが。」

「わかった、わかったから許してくれ、本当に頼む！」

こいつ、馬鹿なんじゃねえの、許すわけ無いじゃん。思いつきり殴り倒す！

「え？お前今なんて言った、許してくれ？許すわけ無いだろ、一回思いつきり殴るから歯を食いしばれ。」

「止めて、お願い、俺お前に本気で殴られたら起きれなくなるから。」

「いや、絶対に殴る。これは決定だ、じつとしてろ、いくぞ！」

パンっ！！！！

「痛い痛い！！折れる折れる折れる！」

「あー、護身術習つといてよかったー。」

あー！こいつ護身術習つてんの忘れてたああああ！！って折れる折れるうううう！！

「もうやめる？それとも、このまま、腕折る？」

「やめるから、やめるから離せええええええ！！！」

「どうしよっか？このまま投げられることもできるけど。」

「人の話聞いている？離せって言ってるの聞こえてる？」

「え？なんて？もつとやれって？骨でも砕こうか？」

「ちよつと待て、やめる痛い痛い痛い！！！！離せ、痛いつてやめる

！！

「ははははは、大丈夫、大丈夫、折らないから、代わりに砕くけど。」

「うぎやああああああ！！痛い痛い痛い！！！！離せええええええ！！

！！

「うるさいなあ、離れたらいいんだろ、離せば。その前にとどめつ

ぐきっ

「右腕が反対に曲がったああああ！！！！こいつマジでやりやがったああああ！！！！」

こいつのせいで俺がする事は昼食じゃなくて病院に行くことかよ！いてててマジで腕の関節反対に曲げやがって、何も持つこともできねえ。と言うか、動かねえ。

「あー、優也、ゴメン。やりすぎた。」

「とりあえず、先生の所行ってくる。」

「せ、先生右腕が大変な事になったんでどうしたらいいですか？」

「はあ？なんだこれ！何をどうしたらこうなるんだ！腕を反対に曲がるのが普通あるか！」

それは俺が聞きたいこと何だが、今こんなに落ち着いてるけど結構痛いんだぞ、この反対に曲がった腕。どうすんだ、これ。もう完全に動かねえぞ。

「佐藤！お前いまから帰って病院行ってこい！」

「はあ、分かりました、それでは帰らせてもらいます。」

いまからこんな腕で帰らないといけないのか。あーあ、もう腕を拳げる事も出来なくなってきた。早く帰ろう、そして病院に行つて腕

見せて早く帰って寝よう。そうしよう。

「本当に、すまん。許してくれ、優也。」

ふつう、許さないだろ、許す方がおかしいわ。あいつ、どうやって、痛めつけようか……、

「ちくしよ、病院行ったら先生に『あなた何をしたらこうなつたんですか!?』って言われた。分かってたけど、やっぱり嫌だ。」

「優也。お帰り、ってどうした、その腕！」

「えーと……護身術習ってるやつに殴り掛かったら折られた、って言ったらどうなる？」

「とりあえず、学校に行って折ったやつに親に感謝料ふんだくる。」
「それだけはやめてくれ！めんどくさい事になることはわかってるから。」

そんな事もわかんないのか！どう考えても、警察入ってきそうな予感しまくってるよ。いい加減にしてくれよ！

「でもな、優也、人間やらなければいけない時だってあるんだぞ。」

「言うわけで警察行くぞ。」
「嫌だ、行きたくない。ちよっ！折れてる方の腕つかむなって痛い痛い痛い！！！！！」

「ごめん、忘れてた、お前のことで警察行くのに。」

「いたたた……。母さん、忘れるの早すぎ……、あと、いきなり警察は、やめよう。お願いだから。」

「なんで、警察じゃダメなんだ？」

そんなのいきなり警察行ったら、絶対学校の生活指導の先生が来るからに決まってるだろ！いちいちめんどくさいことに巻き込まれるは、しかも、絶対その後学校だけの問題になって俺と双馬と先生で話し合う事になるのもうわかってるんだよ！！

「……学校で起きたことだから、まず学校に話してからだと思っただけだ。」

「それもそつか。んじゃ、学校行くぞ。」
セーフ……。今考えてたこと思いつきり言いかけた……。危なかつたあゝ、これ言ったら絶対『うるさい!!』とか『いちいち言うな!』とか言われるんだろうな……。
「いちいち待たせるな、早く行くぞ。」
「ん、おう、ちょっと待ってて。」

15分後

「で、なんでこんなことになるんだ？」
今の状況は学校中の先生が俺と母さんの周りに集まって前には警察官、予想よりめんどくさい事になってしまった……。今すぐにも帰りたい(泣)

「で、何をされてこうなったんだ？」
「えーと……殴り掛かって、護身術使われて腕の骨を折られました。」
だめだ、ここ。気まずい。無理、精神がもたない。早く帰らして。原因は、あなたですので、慰謝料は払われなと思いますよ。」
こんなに気まずくしておいて、慰謝料は払われなのか……。つてええええええええええ!!! 本当か、それ! あんなに痛い目にあつてるのに、……。今気が付いた、これ自業自得じゃん、だから、慰謝料払われなのか、すげえ馬鹿じゃん、俺。何やってんだろ、無駄に『慰謝料もらえる』とか、思ってたんだろ。
「はあゝ、分かりました。すみません……。それでは、帰らせてもらいます。」

15分後

「優也! お前から仕掛けたせいで何にも貰えなかったじゃねえか!」
あれ、俺最初に言ったよね。俺から殴って、護身術使って、折ら

れたって言ったよね。母さん、覚えてないのか。もし、覚えていたら、すごく理不尽だぞ。

「そんなこと知らねえよ！いきなり怒んなよ。耳痛いから。」

「お前が悪いんだろうが！いきなりなんだ！帰ってきたら腕反対に曲げられるは、その理由は友達に折られたって言うわ、ふざけてんじゃねえぞ！！」

おいっ！今重要なこと抜けたぞ！折られた原因俺ってことが抜けてるぞ！

「もう、めんどくさい！早く帰って病院行くぞ、優也！」

「いや、もう行っちゃって！普通に帰ろう！」

「ああ、そうか。じゃあ、帰るぞ！」

やっとこの地獄から解放される……。帰って寝よ。

3日目 後半編(後書き)

感想ください

4日目(前書き)

暴言が少し出ます

4日目

「畜生、右腕が折れたせいで、絵を描くことも勉強もできねえ……。」

「ああ、もう嫌、彼奴のせいだ。今日病院行ってギプスつけた時、思いつきり肉挟まれたし、おかげで折れた方の腕から血はダラダラ出るわ、ギプス付け直すって事で、ギプス二つ分の料金払わされるわ、肉体的にも金銭面的にも痛い……。」

「おーい、優也。飯できたぞー！」

「はいよー。今から降りる。」

飯食つたら、左手で物を書く練習しよつと。

「いただきます。」

へえ、今日は、シチューなのか。カレーがよかったなあ。

「早く食べる、冷めるから。」

「はい。」

ぱくっ

「げ……。」

「どうかしたか？」

「ジャガイモに火が通ってない。」

「あゝ、すまん。」

え、そんなだけ。謝るとかないの。ちよつと、意外だ。

「うん……。わかった。」

5分後

「うー、不味い。ほとんどの野菜に火が通っていなかった……。」

しかも、ルウも溶けずに、固まってたし、とにかく不味い。」

味覚がおかしくなってくる。おかげで、今日、もうなにもしたく

ない、だから、もう寝る。

つぎの日

「寝坊したああああああ！！！！もう間に合わねええええええええええ！！！！」

「ん、おはよう、今日は遅いな。」

「今何時だと、おもってんだ！8時15分だぞ。遅刻しちまったじゃねえかよ！」

「え、今日、学校あんの？なら、弁当作ってないわ。」

ええええええええええ！！！！今日、水曜日だぞ！創立記念日なんかまだまだ先だし。

「わかった！もう行かないといけないから金貸してくんね？」

「え？そんな金無いけど。」

うわああああ！！！！俺、今日昼飯抜きだああああ！！！！

「時間ねえから、行ってくる！」

「おい、ちよつと待て！あー、行っちゃったか。今日、暴風警報出て休みなのに。」

「はあ、はあ。何とか、間に合うか？ちよつと危ないか？あの信号さえ渡れば！……………渡れなかったああああああ！！また、遅刻だああああ！！！！」

あーあ、また、遅刻してしまった……………。もう、駄目だ。諦めて学校行こう。

「あ、信号、変わった。早く行こう。それにしても、今日は静かだな。なんか、あったのか？」

5分後

「げ、今日、学校臨時休校かよ……………。慌ててきた意味ねえ……………」

まあ、遅刻にならなかつただけ、マシか。」

帰ろう、ここにいつまでもいる必要無いし。

「おい、優也、制服で何してんの。もしかして、何にも知らずに学校来たとか？」

「双馬、そのもしかしてなんだが、なんで、そういうお前はなんで制服なんだ？」

「はっははははっ！！寝坊した！！」

声でかい……。突然話しかけてきて、うざい……。しかも、どうせこの後、『どうせだから、一緒に帰ろうぜ！』とか、言うんだろうな。

「どうせだから、一緒に帰ろうぜ！」

当たった、こんなのあたっても、うれしくないけど。

「嫌だ！」

「そんなに大きく言わなくても……。そんなこと言わずに一緒に帰ろうぜえー！」

「……。うるさい、あっち行け、同類と思われたくない。」

「ひでえ！お前、最近扱いひでえ！」

うわあ……。もう周りから変な目で見られてる、最悪だ……。すごく帰りたいというかもう泣きたい。

「なあ、もういいから、一緒に帰るから！早く黙って、お願い！」

「お前が下手に回るの久々だな、そんなに嫌だったか、俺の声？」

お前は、とにかく五月蠅いんだよ！そんなに騒いだら周りに迷惑だろうが！特に俺がだけど！

「うん……。ものすごくいや、と言うか、五月蠅い。黙ってくれ。」

「やだ、なんで黙らないといけないんだ？言ってみろよ、なあ。」
ブチっ

「うぜえんだよ！黙れって言ってるのがわかんねえのか！お前の脳はどうなってるんだ！人の話は聞かないわ、わざわざ人を怒らすような言い方するわ、本当にうぜえんだよ！わかったか！」

「こええ……。ごめん、そんなに怒ると思わなかった（笑）」

「ふわああ、よく寝た、今日は遅刻しないように早めに起きたな、時間は……6時かあ、早く起きすぎたな。もう少し寝るか？どうするか、でも、これで寝てたらまた寝過ぎそうだな気がする。」

うん、とても暇だ。すること無い。テレビも見るものも無い。誰か来ないかな。

ピンポン

「勝手に失礼します。ククク、驚くだろうな、あいつ。」

「で、そのあいつとは、誰なんだ？双馬！」

「ううあっ！なんだよ、驚かせんじゃねえよ。なんなんだよ。お前は。」

「お前がなんなんだ！いきなり不法侵入とはいい度胸じゃねえか！今すぐ殴り飛ばすぞ！」

「ぎゃあ！」

ごちん！

「いったあ……いきなり殴ること無いだろ。」

「まだ殴ってねえ！」

お前が勝手に驚いて倒れたんだろうが！

「とりあえず、仕返しに殴る！おんどりゃあ！」

ブウン

「あぶねえ！いきなりなんだ、やめろ、この野郎！」

「お前からやったんだろうが！」

やってねえよ！お前の勘違いだし。ってまた殴りかかってきたし。

「この野郎！くらえ！」

ブウン

「くらうか……。」

ガン！

「いったあ！頭うつた、死ぬ……。」

「おい、大丈夫か！。優也！、生きてるか！。」

死ぬ、ほぼ無理、もう起き上がりたくない。ああ、意識が遠のいていく……。さよなら。

「寝るんじゃない！。」

「パツチーン！」

「いつてえ！寝ようと思つてたのに叩くこと無いだろ！」

「今何時だと思つてんだ！」

「朝の6時20分だよ！まだ寝てもいい時間だよ！」

「起きるんだ。そして、桐覇に会つてしゃべり倒すんだ！」

ん？こいつつて天河と仲よかったのか？

「なあ、お前つて天河と仲いいの？」

「うん、俺、あいつと幼馴染だけだ。」

「へ？いつからなの？」

「幼稚園ぐらいかな、その時には、もう話してたよ。」

「結構仲いいな。」

「いや、今、絶交中。」

じゃあなんで喋り倒すつて言つたんだ、こいつ！

「お前、馬鹿だろ……。」

「お前、今さらかよ……。とりあえず、絶交中のやつにハイテンションで話しかけたら、どうなるかって言う実験をするんだ！」

「やめとけ、関係を悪化させるだけだぞ。仲直りしたくねえのかよ。」

「正直どうでもいい！」

「今すぐ謝つて来い！お前は、その場の感覚だけで動いてんのか！」

「まったくもつてその通りだ！」

駄目だ……。こいつと話しても、話終わらねえ！

「……… お願いだ、もう家に帰ってくれ。」

「話変えるなよ。」

くそっ！するどい！

「学校行くから、続きは学校でな。」

「? 今日、土曜日だぞ。学校なんて休みだし、お前帰宅部だろ。」
え? ちょっと待て。今日何曜日だった?
「ちょっと待ってる。カレンダー見てくる。」
「……………、今日、土曜日じゃん。昨日って金曜だったっけ? 木曜と
思ってた。」
「な、言つたる。今日は土曜日だって、お前、勘違い多すぎ。俺が
わざと学校行くなって言葉に引っかけてるし。」
「……………。」
「なんで黙ってた?」
「…………… 恥ずかしい。」
「ははははっ! お前馬鹿だ!」
「てめえにだけは言われたくねえ!」
「ああ、もう、くそっ! 恥ずかしいじゃねえか、って、今思ったけ
ど、彼奴って土曜だから家に来たのか? まあ、勝手に入ってくるの
は駄目だが。」
「なあ、今日土曜で暇だから来たのか?」
「いや、違うけど。」
「じゃあ、何のために?」
「ん、暇だから?」
「俺に聞くなっ! あと、理由あつてるじゃねえか!」
「そうだな(笑)」
「こいつ適当すぎてもう、何がしてるかもつわかんねえ!
もう帰れ。今すぐ家に帰れ。何も言わずに帰れ。」
「やだ!」
「帰れって言ってるだろうが! 近所に迷惑なんだよ!」
「はいはい、わかった、わかった。じゃあ昼に来るから、家から出
るなよ。」
「二度と来るなああああああ!」
「じゃあまた数時間後。」
また来るのか、あいつ! どうしようか……………、そうだ

「ずっと寝よう！それがいい、気が付かなかったで済ませたらいいし、よし寝よう！」

「おやすみ〜。」

明日、彼奴の家に行って殴って帰ろう……

6 日目

「げ……、もう12時かよ、寝坊した……。」

今、8時だと思ってた……、いくら日曜だからって寝すぎた……、今から、飯食つても間に合うか？

「たぶん無理だろうな、あいつの家に行くのめんどくさくなってきた。」

「来なくていいよ、今いるから。」

「はあ？いるわけ……、なんで双馬、こんな所いるんだ！」

「侵入した、それしかないだろ。」

うん、こいつ殺す！

「ちよつと待つてる、お前を殺すための道具持つてくるから。」

「いや、ちよつと待て！勝手に入っただけで怒ること無いだろ。」

「勝手に入ってるだけで、ダメって事ぐらいわかれえ！」

「ええ〜、そうなの？いろいろ過程をすっ飛ばしたただけなの？」

「お前は、とばしすぎなんだよ！」

こいつ、思いつきりなぐりとばしてえええ！！！！

「そんなわけ無いだろ。俺は、すっごく小さな声で『おじやまします』って言ってるんだぞ！」

「小さい声で聞こえるかああああ！！！！」

「でも、ちゃんと言ったもんね！入る時言ったもんね！」

「双馬。お前は、子供か！頭脳は小学生並みか！」

「頭脳は中学生並みだが、子供だ！」

「はあ、もういい、帰れ。」

「なんで？暇だから来たのに。」

「あ、忘れてた。ちよつと待つてる、殺すから。」

「うん、帰る〜。じゃあね〜！」

「待て、動くな。ってもういねえ！」

明日、殴り殺してやるうか、彼奴……、もういいや、めんどく

せえ！どうでも良くなってきた…、次会ったら、どうしようか、と
りあえず殴るか！

ピンポン

「こんな時間に誰だろう？」

「暇だから来たぜ！優也！」

「えーっと……誰？」

「最近、まったく話して無いからって忘れるのはやめろよ！天河っ
て言ったらわかるか？」

「あ！覚えてない！誰？通報するぞ！」

「隣の席のやつ顔ぐらい覚えておけよ……。」

一回ぐらいしかしゃべって無い奴覚えるって言う方が無理な気がするけど。

「まあ、いつか。で、何しに来たんだ？」

「とくにする事が無いから来た。」

「じゃあ、用はないんだな。」

「そうだな。なにか、すること考えてくんね？」

「そうだな、今から帰れ、そして、もう来るな。わかったな。」

「いやだ、暇だから、帰ってもすること無い。他に行く場所もない。」

勉強でもやってるよ…、一応来年受験生だろうが、俺もだけど。

「帰って勉強でもしてくれ、もう家に来るな！」

「わかった！ここを、俺の家にするから。と言うわけで、もう帰っ
たから、すること無い！」

「死ね！元の家に帰って、勉強してろ！」

「めんどくさいから嫌だ！」

「じゃあめんどくさいと思ってる時に来るな！」

「分かった、帰ったらいいんだな。」

「そうだよ！はやく帰れよ！こっちはまだ飯食ってねえんだよ！」

「じゃあ、一時間後にもう一回来るから、家にいるよ！」

よし、とっとと飯食ってどっか行こう！じゃないとあいつらが来

て、めんどくせえ！

「飯食うのも、別の場所で食おうかな……。」「

25分後

「どこも混んでてすぐに、注文できるような所がなかった……。ここで飯食って、とつとどこか行こう。」「

「じゃないと、また天河がくる！休みの日は関わりたくないのに。

「何食べよ、ラーメンでも作るか。」「

「あつ、俺もお願い。味は味噌でね。」「

「なんで、双馬、ここにいるんだ！また勝手に家に入ってきて！お前の将来は空き巣犯か！」「

「お邪魔してまーす。」「

「天河もなんで入ってきてんだ！とつとと帰れえ！」「

「「暇だから、嫌だ！！」」「

「お前等、帰れ！飯食わせろ！」

「じゃあ、早く済ませてくれ。それまで、待ってるから。桐覇はどうする？」「

「俺も待ってる。」「

「お前等二人でどこかに行ってくれ！」

「行ってもすることが無いから、嫌だ！」

「自分でやること考える！今、かわりたくないんだ！」

「わかった、じゃあ、また明日。お前の家にいるからな。」「

「双馬はやるって言ってるけど、俺は、やめとく。やっぱ、不法侵入はよくないからな。」「

「じゃあ、俺は、一人で優也の家に入るわ。」「

「おう！……って、はあ！勝手に家に入ってくるなって言ってるだろ！」

「でも、俺は、そのことは無視して勝手に入り込む！だから、気にするな！」

「気にするわ！気にするなっていわれても無理じゃ！頼むから、もう家来るな！」

「わかった、お前が家から出てくるまで待つから、できるだけ、早く家から出るよ！」

できるだけ、遅く行ってやろうか……。もしくは、こいつが来ないぐらいの早さで家出たろうか。

「もう入って来るなよ！」

「できたらな。じゃあ、また明日。」

「早く帰れ！天河も、帰れ！」

「わかったよー、また、明日。」

やっと帰った……。また明日、あいつ等に会うことになるのか……。すげえ、学校サボりたい……。

「……………、そーいや、飯食ってなかった。なんか食べよ。」

早く食って、テレビでも見て、寝よ。

6日目(後書き)

多分、次新しい人が出てきます！

7日目

「ふああ、今何時だ？って6時！？早く起きすぎた。」
「どうしよう、暇。することが無い！」

ピーンポーン

「誰か、来た。はい、どちら様ですか？」

「初めまして、隣に引っ越してきた、暮無くれないです。これからよろしく
お願いします。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

「それでは、さようなら。」

「さようなら。」

誰か、引っ越してきたな。まあ、今までどうり接していったらいいか。

「そういうえば、用意するの忘れてた。早くしないと。」

また、いろいろ忘れるのは困るからなって教科書学校に置いてきた……、持っていくものが一つもない！カバンだけを持っていくのか、もうなにも持っていかなくてもいいんじゃないか？

「暇だから、早めに行くか。」

15分後

「学校についたのは良いけど、早めに来すぎて、暇……。」

「おい、優也、今日転校生が来るって知ってた？」

「知らないけど、それがどうかしたのか？」

「いや、知ってるかどうか気になっただけだ！」

朝早くから、叫ぶなよ……、すごい頭に響くんだぞ。

「ちよっと、うるさい。もうちよい静かにしてくれ。で、どんな人が来るの？」

「確か、女子だった、俺の情報に間違いはほとんど無い。」

ほとんどかよ、絶対じゃなくて。

「そうか、ほとんどか。」

「絶対じゃなくほとんどだ、一回だけ間違えたからな。去年。」

「そういや、そうだったな、去年、女子が転校してきたと思ったら、本当は男でしかもそれが幼馴染だったんだよな。」

「それ、言わないで。もう思い出したくない……。」

「おはよう、佐藤と、双馬。なにしてるの？」

「おはよう、天河、今日転校生が来るって話。」

「えっ、マジで！今日転校生来るの！」

「お前もうるさい。ちよつと静かにしろ。」

「ごめん、ちよつとはしゃぎすぎた。へえ、今日転校生来るんだ。

どんな人だろうね。」

「どんな人でも良くね。いちいち考えるのもめんどくさいし。」

「そうだな、もう止めるか。」

「どうしたんだ、双馬。お前が止めるだなんて、熱でもあるのか？」

「いや、また間違えるのが怖くなってきた。」

「そんな事どうでもいいじゃん。って気が付けばもう、1時間目始まる時間じゃん。」

「本当だ。そろそろ戻るか。じゃあな。」

「じゃあな。」

これから、また誰かクラスに増えるのか。仲良くできたら、いいな。まためんどくさい奴なら関わりたくないけど。

「全員、席に着け。今日は転校生を紹介する。じゃあ、自己紹介を。」

「初めまして、暮無くたないこしな琴音ことねです。これから、よろしくお願いします。」

「んじゃ、暮無は佐藤の前の席な。あと、佐藤、今日日直だから日誌取りに来いよ。」

めんどくさっ！俺の前のやつは……今日休みなのか、めんどくさっ！

「わかりました……はあ。」
「佐藤さん、よろしく。」
「ああ、ええと、蔵無さん？よろしく。」
「暮無です。間違えないでください。呪いますよ。」
「呪うつて、えっ！？なにいきなり!？」
「名前を間違えるからです、次間違えたら、呪いますからね。」
「俺、次名前間違えたら、呪われんの!?マジかよ……。」
「じゃあ、そろそろ授業始めるぞ。」

1時間後

「どうだった、優也！なんか言われた？」
「うるせえ！黙れ、双馬。呪うつて言われたよ。」
「何の話をしているのですか。」
「暮無さんの話だよ。本当に呪えるの？」
「いいえ、呪えませんよ、まさか、本当に信じたんですか、馬鹿ですか。佐藤さんは。」
「すごい嫌そうな顔で見てたから、本当にできると思ってね。」
「そんな力はありません。まあ、霊は見えるんですけどね。」
「そうなんだ、実は、俺も結構幽霊見えるんだ。」
「そうですね！あなたもですか！いつもこのことを言うど気持ち悪がられるので、ちょっと言うのは嫌でしたが、言っただけです。」
「いや、気持ち悪いわけじゃないじゃん、俺も見えるし、それだったら俺は自分が気持ち悪すぎて、家に引きこもってるよ。」
「あの、話が急展開すぎてついていけないんだけど、佐藤、分かりやすく説明して。」
「だから、俺と暮無さんは、靈感があつて霊が見えるんだよ。ここまでわかった？双馬。」

「そして、私はその力を使って、巫女の仕事をしています。」
「そんな事してんの？どんなことしてるの？俺にもできるのか、それ。」

「霊を抜つたり、霊を呼び出したりしてます。多分、あなたでもできると思いますけど、巫女ではないでしょうね。それとあなたの家の近くに引越したのも私です。それなのに名前を間違えるなんて、今思うと酷いですね。」

「まことに申し訳ございませんでした。」

「まあ、いいです。そうだ、今度、家に来てください、一緒に仕事しませんか？」

「いいけど、こいつはどうすんの？」

「来てもいいですけど、霊が見えないと大変ですよ。」

「それでもいいよ！というか、行かせてください！暮無さん！」

「わかりました、それでは、今週の土曜日でいいですか。佐藤さん、えーっと、宮田さん。」

「いいよー！」

「わかった、じゃあ、土曜日にお前の家で集合な。」

今週の土曜に仕事すんのか、まあいつか、何すんだろっとな。

7日目(後書き)

次の話は、土曜日の朝から始まります

8 目前半編（前書き）

前回の話の次の土曜日の話です。

8 日目前半編

今日は、確か暮無さんと双馬が家に来るんだよな。

ピンポン

「もう来たのか。早いな。あいつら。」

「お邪魔してまーす。」

「勝手に上がってくんな。今すぐ玄関に戻れ。」

「ごめん、ごめん。つい、癖で。」

「癖になるほど勝手に上がったのかよ、お前。」

「大体2年ほど、勝手に上がってる。」

「知り合っていきなりかよ…、そーいや、暮無さんは？」

「さつきから、後ろにいますよ。私がどうかしました？」

「お前も、勝手に入ってくんな。玄関に戻れ。」

「わかりました、とりあえず入って待つておいた方がいいと言われ
ましたので、入っていましたが、お邪魔しました。」

「言い訳は、せんでいいから。早く行け。お前の仕事場に行くんだ
ろが。」

「そうですね、いい加減行きましようか。あ、移動は自転車ですよ。」

「めんどいな、電車で行かない？」

「双馬、黙れ。」

「なんで!?! 『めんどくさい』って言っただけで黙れって言われな
きゃいけないんだ!?!」

「ここから自転車です5分の所に行くんですが、電車で行くんですか
?」

「ゴメンナサイ。」

「片言でしゃべるな。」

「早く、いきますよ。佐藤さん、宮田さん。」

「おう、わかった。」

「着きました。ここが目的地の吉之師山神社です。」

「ここ、階段長くない…？暮無さん。あと、なんかいっぱいいるし。」

「何かいるの！？なあ、優也！何かいるのか！」

「……………」

「答えてくれええ！」

「いるよ、頭に矢が刺さって下半身がぐち「わああああ！！！」
何だよせつかく、教えてやってんのに。」

「怖いよ！なんでそんな平気でいられるんだ！？」

「いつも見ているからじゃダメか？」

「すげえよ、お前は。暮無さんも見えてますよね。」

「私には見えない。多分私より、佐藤さんの方が、靈感は強いと思います。そろそろ上りますよ。」

「ああ、明らかに前が見えないが、上りますか。なあ優也ってなんで、浮いてんの！？」

「ああ、さっきお前に見えてるって言うてる時に来て、俺の事を持ち上げて前に進めない。」

「なにをやってるんですか、いきなり憑かれなさい。ちょっと待ってください。？れいかいふうは霊怪封破、れつざんぷ烈惨譜！？」

「こんなお札で取れたのか…？」

「じゃあ、佐藤さんを見てください。ちゃんと地面に立ってるですよ。」

「そ、そうみたいだな。早く行って帰ろうぜえ…。」

「双馬、お前ビビリすぎ。もっと堂々しろ。」

「そうですね、こんな所でビビってたら、あとで死にますよ。」
「死ぬって…ええ！？」

「うるさい、早く行くぞ。双馬。」

「ああ、そつだな。」

「それより、早く階段を上がらましようよ、まったく進んでません

よ。」

「わかった、はやく行こう。」

今日、双馬の奴テンション低いな。なんでだ？

「はあ、はあ。やっと着いた…。ってここ、怖っ！」

「雰囲気だけだろ、いちいち騒ぐな、双馬。」

「いや、騒ぐだろ！古いのレベルを超えてるぞ！」

「気にしたら、負けですよ。ここは、まだマシな方ですから。酷い所なら、こんな感じより少し酷い病棟ですから。」

「まじですか、暮無さん。そんな所にはかり行っていたんですか。」

「気にせず、行こう。なんか入り口にいっぱいいるし。」

「とっとと終わらせて帰りますよ。ここにいる怨霊は、いつものとは、少し違うみたいなので。」

「わかった。じゃあ、暮無、御札分けてくれ。」

「わかりました。今回は結構多めに持ってきたので、分けることは出来ますけど、何枚いりますか？」

「とりあえず1回分分けてくれ。」

「分かりました、じゃあ5枚渡しますね。」

「なんか多くないか？」

「気のせいにしてください。」

「そうか、わかった。」

「もう早く、いかない…？優也、暮無さん。ってもう、いない！？何処言った？」

「なにやってんだ、双馬。行かないのか？行かないなら、そこで待ってけよ。」

「行く！じゃないと俺死ぬ！」

「はやく来いよ。後ろにいっぱいいるぞ。」

「うわっはああいいい！！もういやああ！！！！」

「ああもう、うるさい！いつそ、死んでろ！」

「ゴメンナサイ…。ワタシガワルカッタデス。」

「お前、もう残れ。そして、呪われる。」

「ごめんなさい！」

土下座してきました。そんなに、双馬は怖いのが嫌なのか？幽霊なんて怖くないだろが、まあ、内臓が飛び出てるのはちょっと嫌だけどさあ。

「いい加減にしねえと置いてくぞ、双馬。」

「待つて優也。行くから、ちゃんと行くから。離れないで……。」

「まったたく……、早く行くぞ。」

「佐藤さんと宮田さんは、何をしていたんですか？誰かに連れ去られたと思って、結構探したんですよ。」

「双馬をちよつと説得したら、遅くなった、悪い。」

「ちよつ、あれは、説得じゃなくて、脅しに近かったろうが……。」

「そんな事は聞いてません、早く終わらせますよ、もうすぐ着きますから。」

「え…もう着くの？早くない？この神社そんなに狭いの？」

「狭いですよ、19畳ぐらいしかありませんから。」

それ、狭いって言うのか？広い気がするんだが。

「そろそろ気を付けてくださいよ、佐藤さん、宮田さん。悪霊どんどん出てきますよ。」

「そうですね、離れてみるから頑張れ。」

「優也、お前性格コロコロ変わりすぎ……。」

「気にすんなって双馬。いつもの事だから。」

「気にするだろ、普通。」

「俺に普通は通じない！だから、気にすんな。人生無駄にするぞ。」

「おまえのことをおかしいって思って人生無駄になるような人生は送ってないから、大丈夫。」

「そろそろ、きます！佐藤さん、宮田さん。手伝ってください！」

「わかったけど、何すんの？」

「分けたお札で、戦ってください！」

「はあ。」

めんどくささ、今すぐ帰りたい。けど、やんねえと帰れないんだよな。早くやるか。

8 目前半編（後書き）

後半へ続く…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4759s/>

ドジで不幸な私はボロボロです...

2011年12月11日20時45分発行